

自彊前進

題字 西村直子

NO. 47 令和6年3月2日(土)

新潟大学附属新潟中学校 学校だより
文責 校長

※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと
(校歌3番の文言から)

はなむけのことば

今シーズンは、登校に困難を来すような大雪に苦しめられることのほとんどない、少雪の冬となりました。しかしながら、新潟の冬の寒さは、やはり厳しいものがありました。戦国大名上杉家の家老 直江兼続を描いた小説「天地人」の著作で知られる新潟県長岡市出身の作家 故・火坂雅志さんは、「雪国の冬はつらい。我慢しなければならぬ。だが、雪国の人にはただ、我慢しているだけではない。我慢しながら、力を蓄えているのだ。そして、春にはきれいな花を咲かすのだ」と仰ったそうです。校地内の桜のつぼみが膨らむのも、そう遠くない時期となりました。このようなよき日に、新潟大学附属学校部 統括長 森恭(もり やすし) 様、附属新潟中学校 父母教師会 会長 内山航(うちやま こう) 様をご来賓にお迎えし、第七十六回 卒業証書授与式を挙行できましたことを、心から喜ばしく思います。そして、新潟大学附属新潟中学校を卒業する一九名の三年生の皆さん、卒業、おめでとうございます。

令和二年の年明け以降、新型コロナウイルス感染症は、世界全体の安全を脅かすほどの猛威となりました。学校現場にも、その影響は顕著に表れました。密集・密閉・密接の「三つの密」を回避することが最優先され、学校における様々な取組全てに制約が課せられる日々でした。三年生が当校に入学した令和三年は、まさにその制約が当たり前の状況でした。一年生の時は、泊を伴う研修旅行に行くことが許されませんでした。二年生になって、ようやく「旅」に出かけることができるようにはなったものの、行き先は「隣県まで」とされ、やはり制約は如実に残されていました。このように、一年時と二年時は、制約に縛られる学校生活を余儀なくされました。

今年度五月に新型コロナウイルス感染症が五類に引き下げられてからは、やっと三年生の本領が発揮された一年となりました。「附中の明日を語る会」で語り合ってきたこと、そこに掛ける思いを基に、旧態依然とした学校行事や生徒会活動をよしとせず、常に変革を目指してきた三年生でした。その力が遺憾なく発揮されたのは、十月の研究会ではなかったでしょうか。附中史上初の二日間の研究会では、ポスターセッションが行われました。授業、行事、生徒会活動等、あらゆる活動でエージェンシーが育まれてきたその様子が、ポスターセッションでは説得力をもって表現されていました。研究授業の後に設けられた「生徒が学びを語る会」では、三年生は実に堂々と、単元や研究授業における学びを説明する姿がありました。また、この一年間、職員室では、「三年生は成長した」という声が至るところで聞かれました。きっと、これまでの学校生活の中で、仲間と関わり合い、刺激を与え合い、励まし合いながら一人一人が成長してきたことと思います。

さて、新たなステージに進む卒業生にひとつ、メッセージを贈ります。それは、「自主独立・協同」の生徒会スローガンを忘れないでほしいということです。このスローガンは、この三年間、ありとあらゆる活動を振り返るときの、規準となってきたはずです。確固たる自己、そして他者との関わり合いの中で附中生は成長してきたはずです。その先に、現時点の自己があり、それは未来へつながります。この先に遭遇する難局に、立ち向かうためのエネルギーの源は、「自主独立・協同」の生徒会スローガンの基、高みを目指し続けてきたこれまでの軌跡です。このことを胸に秘め、この先の人生を力強く歩んでください。

保護者の皆様。本日はお子様の中学校卒業、まことにおめでとうございます。手塩にかけて育ててこられたお子様の、義務教育期間の修了という人生の節目にあたり、その喜びはいかばかりであろうと拝察いたします。心よりお祝いを申し上げます。また、この三年間、当校の教育活動にご理解・ご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

結びに、卒業生の皆さん。いよいよ巣立ちの時です。私たち職員一同は、いつまでも皆さんの味方です。応援しています。卒業生の皆さんの、これからの人生に幸多かれと祈り、はなむけのことばといたします。

令和六年三月二日
新潟大学附属新潟中学校
校長 山本達也